

「母の少女時代」

滝井 知子さん 71歳

96才になる母は老人ホーム（サ高住）でおだやかにくらしているが、私達の青春時代とは全くちがったものだった。聞き書きした。

都会暮らしにあこがれた祖母は、勤め人の祖父と結婚し、3人の娘をもうけ、幸せに町で暮らしていた。

昭和12年に中国との戦争がはじまり、祖父は出兵し、昭和14年に戦死してしまった。

祖母はしかたなく子ども達を連れ祖父の田舎で暮らすことになった。病弱の曾祖父母の指導を受け、慣れない畑仕事をした。近所の高齢男性に田をすいてもらえば、労働で返さなければならず、体はえらかったろうに思う。

母は女学校に進学したが、やがて「収入がないようだから女学校をやめますか？」というようなことを言われたが、戦死した家族にいくばくかのお金が払われることになったらしく、勉学を続けることができた。

やがて対米英戦争になり、学生はみな出陣したり、工場へ働きに行くことになった。

母は、家から一番近い航空機工場へ働きに行った。近いと言っても2時間はかかった。食事は、こうりゃんご飯、豆粒ご飯、すいとん、汁は実のない塩湯で、副食はたぶんなかった気がすると言っていた。週一回の帰宅で家から持って帰った食事を分けあって飢えをしのいだ。土曜帰る時、終バスに間に合わず、暗い山道を一時間かけて歩いて帰ったらしい。

12月頃より昼夜二交代勤務となり、夜帰れば、ノミの急襲で寝ればすぐ夜明けとなるくたくたの生活だったらしい。作業着は油まみれになり、洗剤も少なく、家で灰汁にしばらくつけて洗ったらしい。

友達の中には栄養不良で脚気や急性肋膜炎になる者もいた。宝塚歌劇の生徒もいたが、労働の軽い事務をしていたらしい。

やがて戦争は不利になってきて、工場を宝塚の山に移動することになった。山に坑道を掘る仕事は、女子には体にこたえた。旋盤を一つ一つ運ぶ仕事をしている最中、米軍の飛行機がやって来て、目の前で運んでいた旋盤などに次々機銃弾があたり、いつ死んでもおかしくない状態だったが、幸運にも助かることができた。航空機工場は大空襲で全滅した。既に3月女学校を卒業しており、7月に次の進学先へとすすんだ。

終戦間近の8月のはじめ、やはり勤労奉仕で暑い中、防空壕を掘っていた母の妹は、突然高熱を出し亡くなった。熱中症かもしれない。

やがて終戦を迎えたが、曾祖父母が次々と亡くなり、祖母はいったいいくつ葬式を出したことだろう。つらい年月だったと思う。

母が進学先へ帰る途中、梅田付近では、生死のわからない横たわったままの人をたくさん見たらしい。父も兄が南方で戦死し、戦後遺骨収集に参加したが、手がかりはない。

もっとたくさんの不幸を体験した人もおられるだろうが、こんなことは二度とおきてほしくない。母とともに願う。

参考資料

平成10年1月1日発行 「歌垣郷友」第71巻